琉球大学学術リポジトリ

自治基本条例の比較的・理論的・実践的総合研究 報告書No4：沖縄の自治の新たな可能性　自治研究講座

メタデータ	言語:
	出版者: 仲地博
	公開日: 2009-11-18
	キーワード (Ja): 自治基本条例, 市町村モデル条例, 沖縄の自治, 自治の新たな可能性, 自治体再編, 市民自治, 住民主権, 道州制
	キーワード (En):
	作成者: 仲地, 博, 江上, 能義, 高良, 鉄美, 前津, 榮健, 佐藤, 学, 島袋, 純, 徳田, 博人, 照屋, 寛之, 宗前, 清貞, Nakachi, Hiroshi, Egami, Takayoshi, Takara, Tetsumi, Satou, Manabu, Shimabukuro, Jun
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/13207

第４回　下河辺淳氏インタビュー

日時：２００３年１１月１７日午後２時から午後４時（２時間）
ところ：第１２森ビル　下河辺研究室
インタビュー対象者：下河辺淳
インタビュアー：江上能義、眞板恵夫
記録者：眞板恵夫
※、発言者の敬称

●下河辺メモの背景

江上：それでは、きょうの本題に入らせていただきます。先生のメモとこの日付によると、１９９６（平成８）年の３月４日、梶山官房長官とお会いになるところから始まるんですけども、その前の流れを少し整理すると、１９９６年に１月に橋本内閣が成立しまして、それで橋本首相が初の施政方針演説で、「沖縄の方々の苦しみ、悲しみに最大限、心を配った解決を図るため、米軍基地の整理統合・縮小を推進する」と述べます。そして、１月２３日に橋本総理と大田知事が初めて会談するんですけども、このときはまだ、対立したままの話ですよね。大田知事からみれば、橋本政権は軍事内閣もしくはタカ派内閣という感じだったと思うんですね。それで、２月２３日に日米首脳会談があって、橋本首相がアメリカに渡ってクリントン大統領と会談するわけですけども、このときに橋本首相は普天間問題に言及してます。それはなぜかといいますと、最初の会談で大田知事が橋本首相に対して、普天間基地を返還してもらうことが沖縄の望みだということを述べた、さらに首相の渡米直前に諸井さんが沖縄に行って会ったときの大田さんとの話で、大田知事が普天間返還を最優先に考えて欲しいと述べた。それで結局、普天間返還は難しいとという外務省の意向もあったんですけども、橋本首相はあえて日米首脳会談で普天間問題に言及したんだろうと思います。こういう流れを受けて、それでその後、高裁で代理署名裁判が大田知事側の敗訴となりました。その後、最高裁に行くんですけども、最高裁で沖縄側が敗訴することはほぼ分かっていたんで、それで、そろそろ決着をつけなければならないというところで、おそらく、梶山官房長官が先生を訪ねられて、沖縄問題大変なことになってきたから、なんとか力を貸して欲しいということをおっしゃったんだと思うんですね。それで、官房長官と会われたあくる日に、先生は大田知事と会談されています。で、先生が大田知事とじっくり話されたのはこのときが最初ですね。
下河辺：うん。
江上：そうですよね。それで、官房長官に頼まれて先生は大田知事と会談に臨まれたんですけども、そのときの大田知事の話された内容とか印象とかはどういう感じだったんですか。

下河辺：いや、もうそのときは、政府と沖縄のつなぎが終わってからですから、わりに和やかに話してましたよ。
江上：あ、そうですか。それまでに大田知事と総理とのつながりは、ある程度できていたんですか？
下河辺：できてたって言うか、その私の解説を受け入れていましたから、総理もそのつもりだし、知事もそのつもりだったんじゃないすか。
江上：ああ、要するに、普天間問題で沖縄が望むように積極的に取り組むと、橋本首相も言っていたんですか。
下河辺：言ってました。
江上：大田知事にそう話したら、大田知事は、非常にありがたいということで、心を開きはじめていたんですか。
下河辺：そうです。
江上：そうなんですね。最初は、大田知事は橋本政権に対して、軍事政権みたいだとか、タカ派政権みたいだって思っていた。そうした警戒感や反感みたいなものは、先生と話したときは薄れていたんですか。
下河辺：だから、半年かけてそれを説得しといたわけですから。

●３月の時点では敵同士だった

江上：ということは、ここの３月の時点でですか。
下河辺：だから３月では敵同士だったんです。
江上：３月時と会ったときは、敵同士だったんです。
江上：まだ、敵同士でしたよね。
下河辺：それで、８月までかかって、両方説得したわけです。
江上：やはり橋本政権に対する大田知事の警戒感っていうはかなり強かったんですか。
下河辺：３月はね。
江上：あまり信用できない、と。
下河辺：３月ごろはそれであったし、総理の方も、知事は革新の代表であって、安保反対で基地を撤去せよっていう一本槍の意見だって思っていたわけですよね。
江上：この時点ではですね。そうすると、一応、先生としては、このころはまだあれですよね。まだ政府と沖縄のパイプ役をすることはまだ決めてらっしゃらないですよね。
下河辺：ええ、もちろん、その決めてはいなくて、決まったことは一回もないんですよね。ずっと曖昧なまま、なんか関係させられていて。
江上：（笑）　先生としてはずるずると引き込まれていったとか。
下河辺：８月にメモを出してから、事務的な話に。
江上：なったんですね。

下河辺：なっちゃった。
江上：ああ、そうですね。それまでは、ちょっと曖昧な関係だったんですね。
下河辺：そうです。
江上：そうすると、3月5日に大田知事と話をされて、大田知事がどういうことを考えて、どういうことを望んでいるか、というようなことを先生が聞かれて、それで3月7日に、2日後に橋本首相と会われたんですね。
下河辺：そうです。
江上：そのときは、おそらく大田知事がどのようなことを考えているかということを橋本首相に伝えられたんですか。
下河辺：大田知事のことも言いましたけども、なんか総理に私の意見を言って、知事もそれを理解しているから、そういう前提で、会ったらとうかって、言ったわけですね。
江上：そうしたら、橋本首相はどのように返答されたんですか。
下河辺：それなら、そういうふうにしてみようって言い出したから、だんだん知事と総理が、会って話し合う雰囲気ができてきたわけです。
江上：両方ともに、会ってみようかなっていう雰囲気ができてきたわけですね。
下河辺：そうです。
江上：先生はそういう雰囲気作りを行なう努力をなさったんですね。でも、まだ食い違いがいろいろあったけども、食い違いがあってもいろいろお二人で話されたらどうですかという風になっていかれたわけですね。
下河辺：食い違いって言うよりも、現実の認識の仕方とか、将来の見通しが分からないときでしたからね。

●3月の橋本・大田会談

江上：そうですね。ちょっとどうなるか見当がつかなかった時期ですね。そして、3月の22日に橋本首相と大田知事が会談することになるんですね。
下河辺：はい。
江上：そうですね。で、このときは、要するに、話し合ったということ、同じテーブルについたということが意味があったんでしょうか。
下河辺：とっても意味があったんです。
江上：この会談で、意見の一致を見たとか、あるいはこういう成果があったということがあったんでしょうか。
下河辺：ただ、面倒なのは佐藤内閣がアメリカとどういう密約しているかっていうのが、お互いに不信感なんですね。
江上：佐藤内閣がですか。
下河辺：佐藤内閣でしょ、返還問題は。

江上：はい、そうですね。
下河辺：そのときに、返還がよく成り立ったっていう面だけが評価されたけど、アメリカが返還に応ずるのには、相当たくさんの条件を飲まされてんじゃないかっていう。で、繊維問題がひとつだけ、表面に出ましたけども、繊維以外にいろいろあったんじゃないかっていう。特にロッキードとの関係とか、いろいろとあって、沖縄に核武装することについても、本当はいろいろあったんじゃないかとか、そういう疑いがとても濃厚でしたよね。
江上：そういう話を大田知事が橋本総理になさったんですか、その３月２２日の会談で。
下河辺：いや、直接はやっぱり、言い切れませんよね。
江上：言えませんよね。
下河辺：証拠がないから。
江上：でも、大田知事の側に、沖縄返還のときのいろんな不信感があったということですか。
下河辺：あったですよ。
江上：そうですか。でも、また橋本首相は橋本首相の方で、やはり大田知事に対して不信感があったんでしょうか。
下河辺：いや、それは佐藤さんに対する不信感なんですね。佐藤さん、アメリカと密約した内容を自分で背負い込んで外に言っていませんから。自民党でも誰もわかんないんです。
江上：そうですね。
下河辺：だから橋本さんは、総理になってから聞いてびっくりしているわけですから。
江上：そうですか。そういう問題があったわけですね。
下河辺：そうですね。
江上：その問題については、これからずっと話し合いが進展していくなかで、佐藤内閣の沖縄返還時における、そういった不審の根源をなすものは、お二人の間で少しずつ解けていったんでしょうか。
下河辺：いや、解けることはないんじゃないすか。
江上：ないですよね。
下河辺：お互いにわかんないで、しゃべってんだもの。
江上：そうですね。しかし、最初に橋本総理と大田知事が会談するときに、それが大きな暗雲となっていたけれども、そういうのが遠ざけていたというとこなんですかね。それがやはり一番大きかったんでしょうか。
下河辺：いや、いや、会ったときは、もう、そのへんとこを超えて、沖縄のためにっていうことで会ったわけですから、佐藤内閣がどんな密約しているかっていうことは棚上げにせざるを得ないですよね。どっちも知らないんですから。
江上：そうですよね。それを言っても埒が明かないわけですね。
下河辺：こないだお貸しした、楠田さんだけが知っているんですね。楠田さんには文句言ったんでけども、「楠田日記」っていうのは、そこんとこぼやかしてあるって言ったら、や

っぱり総理の見解なんでしょうね。
江上：そうでしょうね。若泉さんは先生からお借りした「楠田日記」に数多く登場しますね。
下河辺：そうですね。
江上：でも、返還のときの裏舞台の実情については、楠田さんは記述していませんね。
下河辺：死んだから楠田さんの日記、ちょっと借りたいって言ってんだけど、まだうまくいっていないんですけどね。
江上：そうですか。
下河辺：本当は手帳に書いてあんじゃないかと思うんですね。
江上：そんな気がしますよね。また、そこを確認できれば、また大きな発見になりますね。
下河辺：いやあ、なんか当然だったろうっていうことを確認できるだけですけどね。

●事前から分かっていた普天間返還

江上：そうですけどね。それでその後、４月１２日に普天間返還が合意されて発表されます。橋本首相がモンデール駐米大使との共同記者会見で、普天間飛行場を５年から７年以内に全面返還するということに合意した発表されました。この普天間返還については、先生は事前にわかっていたんですか。
下河辺：うん？
江上：普天間返還については、先生にとっても突然の話でしたか？
下河辺：いや、そうは思わなかったですね。それじゃ当然、普天間は返すと思っていましたから。
江上：ああ、そうですか。
下河辺：それは、普天間は移転しなくちゃ防衛上の役割は、果たせないっていうのが、海兵隊の結論ですから、移転ていうのは追い出されての移転ではなくて、軍事技術上の必要から移転するわけですから、当然、移転すると思いましたね。
江上：そうですね。先生はそれまでの経緯もずっとご存知ですから、追い出されてではなくて、要するに、普天間基地が老朽化しているから、それで、新しい施設に移ったほうがいいということで普天間返還となるだろうなということを、先生は事前にお察しになっていたんですか。
下河辺：だから、面積的には４分の１で大丈夫って米軍は言っていたわけですよね。それが地元の市長さんたちが、軍民共用飛行場で、１０００メーターの滑走路がいるっていったから、小さい規模でなくなっちゃったんですよね。
江上：それで、このときの普天間返還合意は代替施設の条件付でした。これも先生の事前の理解からすると、やはり条件付になるだろうなと。つまり、普天間を返す代わりに新しい機能を備えた代替基地を。

下河辺：米軍にしたら、近代化のために移転するということであって、住民との関係で普天間を返してもらう運動に、合意したなんていうことは一切ないですよ。
江上：ということは、当然、そういうものを要求して新しい場所に移る。
下河辺：ただいま工事中だから、攻撃はやめてください、なんて言えないですよね。だから、普天間で防衛しながら、新しい基地を造ろうとしたわけですよ。移転というよりは、私は装備の近代化だと思うんですけどね。
眞板：とすると、１９９５年９月の米兵たちのよる少女暴行事件であるとか、大田さんの代理署拒否っていうのは、あくまでハプニングであって、米軍としてはもともと普天間からどこかへ移りたかったということが既定路線としてはあったということですか。
下河辺：そうなの。
眞板：それが何かごちゃごちゃになって、少女暴行事件があったから、じゃあ海兵隊も県民にご迷惑をかけたから、じゃあ移設しましょうねっていうわけではなかったという。
下河辺：そんな甘い話じゃないですよね。女の子がレイプされ暴行したから、移転しますなんてことにはなんないですよ。補償とかお詫びはするかもしれないけどね。それが基地の移転なんていうことにはなんないすね。

●嘉手納統合案から海上ヘリポート案へ

江上：でも、あの当時もいまもそうだと思いますけど、県民も国民もそうだろうと思っていますよね。事件が起こったから沖縄で反基地運動が激化して、アメリカが譲歩して移転することになったとおおかたの人びとはそのように受け取っています。だが、先生によれば、そんなに甘い話じゃないということですね。
　従来の考えとはずいぶん違った見解ですよね。参考になります。しかし、普天間返還の条件からすると、最初、嘉手納統合案が出てましたが、嘉手納の周辺の人たちが非常に強い反対意見が出まして、それで嘉手納統合案がだめになって、それで辺野古移転になる？
眞板：嘉手納統合案とそうですね。それから、ずうっとあとにきて、津堅島の埋め立てしてっていう
江上：津堅島は、ずうっとあとだ。それからもう、あの海上ヘリポートの話になっていくんですね。
下河辺：嘉手納の問題は、住民の反対で止めたんじゃなくて、その航空隊が受け入れんの拒否したわけです。
江上：空軍のほうが反対したんですね、海兵隊を引き受けるのを。
下河辺：海兵隊入れるの嫌だって言って
江上：米軍内部の問題がありましたね。
下河辺：そうです。
江上：それがあって、嘉手納統合案はすぐ潰れました。

下河辺：そうなの。
江上：それで、その後、橋本首相が海上ヘリポート案を発表されるんですよね。
下河辺：そうです。
江上：で、大田さんはやっぱりこの普天間返還っていうのは、自分も望んだことだし、県民も望んだことを橋本首相は、実現してくれたっていうんで、とても喜んだんでしょうね。
下河辺：いやあ、原則は県外移転っていうことですから、
江上：あ、県外移転。
下河辺：県内に決まったことは、知事としては喜べないんです。
江上：喜べない。
下河辺：選挙民に対して県外移転で訴えていたわけですから。
江上：じゃあ、やっぱり、この普天間返還を大田さんは最初から、手放しではとても喜べないような状況だった。
下河辺：喜べない。
江上：でも、橋本首相からすると、普天間返還っていうのを強く望んだんじゃあないかと。ということで、それが自分が一所懸命このアメリカ政府と交渉して、取り付けたわけだから、それをもっと喜んで、しかるべきじゃないかというようなお気持ちは、橋本首相にはあったんじゃないですか。
下河辺：いやあ、そう思っていないっていうのは、知事はもともと革新派だと思っているから、返ってきたから喜ぶっていうことじゃあないだろうって総理は思ってたんじゃないすか。
江上：あ、そうですか。じゃあ、まあ、そんな手放しでは喜ばない
下河辺：グアムにでも移転するって決まったら、喜んだかもしれない。
江上：ああ、そのことは橋本首相も分かってた。
下河辺：分かるわけですよ。
江上：そうですか。でも、そうはアメリカとの交渉ではならなかったわけですよね。アメリカはそうじゃないわけですから。
下河辺：いや、だから、知事にすると、最高裁の土地に対する裁判の結論と総理が安保上、沖縄の基地を断れないっていう、ふたつをはっきりして、止むを得ないっていうふうに言いたかったわけですよ。
江上：で、４月１７日に日米首脳会談がありまして、日米安保共同宣言が発表されます。それで、先生は、７月２３日に神戸の問題と保険の問題って書いてありますけども、７月２３日に橋本首相と再び会談なさって、そのときに橋本首相がちょっと沖縄のことも、っていう話をなさってて、このときは先生は、いろんなテーマがありましたから、それでまた後日ということで、７月２９日もう一回、沖縄の問題で橋本首相とお会いになっているんですね。
下河辺：そうですね。

●首相からまとめ役の依頼

江上：それで、このときに裏のまとめ役を橋本首相が下河辺先生にお願いしている。そのときは、まだ下河辺先生は引き受ける気はなかったと、いうふうにおっしゃってますけども。ま、橋本首相が先生に沖縄問題の裏方でまとめ役をしてくれないか、というのは、どういう理由だったんですか。どういう理由っていいますか、なんかそういう、なんかあったんでしょうか。

下河辺：だから、さっき言ったように、政府としてやってくれっていうのを総理は、熱望したわけですよね。

江上：政府側の人間として、このときもですね。

下河辺：特別補佐官でも何でもいいから、肩書きつけるから、ちゃんとやってくれって言ったんですよ。

江上：そうすると、これは別に裏のまとめ役っていうことではなかったんですね。裏でなくて、裏でも表でもなかったんですね。

下河辺：いやあ、表です。

江上：表ですね。このときはむしろ。

下河辺：私が裏も表も嫌って言ったから、違ってきた。

江上：違ってきたわけですね。で、このときは表でやってくれと、いうふうに言われたけど、先生はこのときは、引き受けなかったんですね。

下河辺：そうです。

江上：先生、それは、引き受けられなかった理由は？

下河辺：だって、県民のこと考えたら、政府の立場に立っちゃったら話し合いできないじゃない。

江上：そういう意味ですね。政府の一員として政府の取りまとめ役するというのは、沖縄県民の意向を考えて、とても引き受けられなかったと。

下河辺：そう。

江上：そういうことですね。そのあとに、８月６日に大田知事と沖縄で、会われますね。これは、もう、初めから大田知事と会われるために、だけに行かれたんですか。

下河辺：そうです。

江上：これは、橋本総理とか、あるいは梶山官房長官とかの？

下河辺：関係ないです。

江上：ぜんぜん関係ない。ただ、先生ぶらりと行かれた？

下河辺：ぶらりとというか、吉元がちゃんと段取りしてくれましたから。

江上：ああ、そうですか。そうすると、吉元副知事にはこのときに、やはり先生に間に入って欲しいという意向があったんですか。

下河辺：いや、いや、もう、間に入っていたわけですから。
江上：もう間に入っていたわけですね。
下河辺：そのときは、私が行くことの段取りをしただけであって、関係はできていたわけです。

●「下河辺メモ」の作成

江上：関係はできていたわけですね、明確な取りまとめ役ではなくて。それで吉元副知事の段取りで８月６日に大田知事と会われ、その３日後の８月９日に副知事と官房長官と、東京海上の研究所で会われました。それで大田知事からも、間に入ってまとめて欲しいと言われ、このときに下河辺先生は、日本政府と沖縄県をまとめる裏役を引き受けることを決心したと考えてよろしいでしょうか。
下河辺：裏役って言うよりも、私の考え方をメモにするから、それを見てくれっていうことを言っただけなんですよ。
江上：そうですか。自分の考え方を示すから、それでいいか、ということですか。
下河辺：いいかどうかよりも、それを参考にして、国と県との間で、話し合いをしなさいっていうことを言ったわけです。
江上：ああ、そうすると、先生のメモ、いわゆる「下河辺メモ」を作成して示すからと。
下河辺：そう。
江上：作成して示すから、少し考えたらどうかということだったんですか。
下河辺：そうです。
江上：そういうことをこのときに、ある意味では予告なさったわけですね。
下河辺：そう
江上：そういうことですね。でもしかし、そういうことをさなるということは、すでにそういう役割を始めてらっしゃったということですね。
下河辺：そうね。
江上：そういうことですね。それで、８月１２日にその非常に重要な先生のメモが作成されて出てくるわけですけども、その下河辺メモの作成は、先生の独断で作られたんですか？それともいろんな方々に相談なさったんですか。
下河辺：それはもう、ずっと引き続いてやっていたわけだから、メモを書くときは私の記憶で、全部書いちゃったから、誰とも会ってませんよ。
江上：橋本首相とも大田知事とも、あるいは長い間、沖縄ともお付き合いがあるから、そういう蓄積の中で先生が独自に作成されたわけですね。
下河辺：まあ、要するに結果を整理しただけですからね。
江上：特別に誰にも相談されることはなく、先生が独自で書いたわけですね。先生の考え方をまとめられたわけですね。

下河辺：そうです。

●「下河辺メモ」を見た首相の反応――亜熱帯研究所構想に意欲

江上：そういうことですね。それで、このメモを橋本首相にお見せになるわけですよね。
下河辺：そうです。
江上：そのとき、橋本首相は先生のメモを見られてどんな感じでしだった？
下河辺：これでいいんじゃないか、と。そして、県の意向を確かめようと、ただ総理自身では、提案したプロジェクトの中の亜熱帯研究所っていうのは興味があるねえっていう話はしてました。
江上：そうですか。橋本総理が亜熱帯研究所に興味があるとおっしゃったんですか。
下河辺：亜熱帯研究所を国際級のレベルで造ったらどうかって言ってましたね。
江上：そうですか。
下河辺：だから、それじゃあそうしましょうって言っていたら、なんか知事がその話をしたら、自分で作ったちゃったんですよね。
江上：県のほうでですね。
下河辺：県のほうでね。だから、橋本さん、がっかりして、知事が自分でやるら、それで任せようって言って、それでおしまいになっちゃった。
江上：ちょっと段取りが違っちゃったんですね。先生はそのことを再三、指摘されていますね。
眞板：先生、それで、そのくだりなんですが、御厨先生のオーラルを拝見するとですね。県立で先に作らせて、それから、国立化へ向けて努力しようっていうようなお話が、実はこの中に出てくるんです。
下河辺：県がそう言ったんですか？
眞板：いえいえ、下河辺先生がこの中でそういうお答え方をなさっているんですよ。
下河辺：いやあ。だから、いまとなってはしょうがないと、県立なんかじゃとてもだめじゃないっていうことを言ったことは確かです。
江上：でもできちゃったんですね。
下河辺：政府として大蔵省にしたら、県立でできたものを国立にするなんて経験ないすもんね。
江上：そうですね。別ですからね。県で作っちゃったら国は関係ない、って感じになってしまいますね。私も長い間、琉球大学にいましたが、国立大学ですから沖縄県とはなかなか一緒に仕事ができないんですよね。予算も権限もぜんぜん違うから。
下河辺：それに、やっぱり、国が造ったら、ちょっといいと思ったのは、さんご礁の専門家が、一人だけいたんですね。
江上：山里先生ですか。

下河辺：山里さん。彼だけが世界に通用する学者だったんで、その学者を頼って、国立を造っときゃあ良かったなあと今でも思ってんですけど。一度、県立で作っちゃうと、文部省としたらなかなかちょっと、国立に直すこと、難しいですよね。
江上：そうでしょうね。それで、梶山官房長官もそのとき、下河辺先生のメモを見られたと思うんですけども、官房長官は何かいわれましたか。
下河辺：別に何もっていうか。なんか少しずつ実現するといい、っていうことは言ってくれましたけど。たくさん、提案出したから、一度にはとてもできないって言って、
江上：先生のメモを事前に古川官房副長官も見られたんですか。
下河辺：もちろん、古川と一緒で親しい吉元と私と古川と３人で、議論したんですから。
江上：そうですね。古川官房副長官は先生のメモに対して何かおっしゃったんですか。
下河辺：いや、いや、これでどうなるかやってみようって、言ってくれてましたよ。彼がまとめ役だから、良い悪いっていう感じじゃ発言しませんからね。
江上：なるほど。吉元さんはどうだったでしょう。
下河辺：吉元さんも、政府がこれをやってくれんなら、ありがたいっていう立場でしたから。
江上：ああ、そうですか。
下河辺：私のメモに対する討論っていうのはなかったですね。
江上：じゃあ、もうみんな賛成されたんですね。
下河辺：みんな
江上：異議なしですね（笑）　これでいけるぞ、というわけですね。むしろ沖縄側としては、吉元さんとしては、これだけ先生のメモに提示されたものを本当に日本政府がやってくれるんだったらありがたいという感じだったんですね。
下河辺：そういう立場でした。
江上：それで、８月２８日に代理署名訴訟の最高裁判決が出まして大田知事の敗訴が決まります。で、この後の９月５日に、先生のメモをもとに古川試案が作られるんですね。９月５日に古川官房副長官が先生のメモをもとに、公式発表できるような試案を作られたんですね。
下河辺：うん
江上：そして橋本総理のところで、下河辺メモの公式化について、議論がありました。でもこの議論では、先ほどの先生のご意見だと、先生のメモの中身についてはほとんど異論がなくて、それをどのように公式の政策として発表できるものにするか、についての話し合いに終始したんですか。
下河辺：そう、そう

●５０億円の調整費と政策協議会の設置を提案

江上：そういうことですね。で、首相自ら、５０億円の調整費と政策協議会の設置を提案されたということですか。橋本首相が独自にふたつのアイディアを出されたんですか。
下河辺：いや、いや、大蔵省と十分相談してあったと思いますよ。
江上：橋本総理が大蔵省と話し合った結果、ふたつの提案が出たということですね。
下河辺：総理が勝手に言うってことはないです。
江上：なるほど。それらは十分、根回しして調整した上で出てきたわけですね。それで、５０億円の調整費と政策協議会の設置が検討されていることは、先生は事前に十分ご存知だったんですか。
下河辺：そりゃそうです。
江上：最終的に大蔵省等の調整を経て、合意を得られて５０億円の調整費と政策協議会を設置するということが古川試案の中で盛り込まれたわけですね。
下河辺：そうです。
江上：その後、９月７日に沖縄で吉元副知事と会談されていますけど、この内容を巡って吉元副知事と話されたんですね。
下河辺：いやあ、知事と会うための準備をしただけですよ。
江上：そうですか。そうすると次の８日の方が本番ですね。
下河辺：いや、その公式には８日ですけども、８日にやったことはぜんぶ、７日に吉元くんに解説して、どうだろうって言って、彼がそれでいいと思うって言うから、そのまま、知事にしゃべったわけです。
江上：そうすると、おそらく８日に先生と大田知事が会われたときには、もう７日に吉元副知事と大田知事の間でほとんど話し合いは済んでいたんでしょうね。
下河辺：ついたっていうか、ついといてくれないと、困るって言ったから、ちゃんとやってくれたですよ。

●基地に対する住民の意識変化――県民投票結果の見方

江上：吉元さんがやってくれた。９月８日は、先生は大田知事とかなり長時間の会談をなさったということですね。
下河辺：それはその、こういったメモを巡る話は、もう十分事前に吉元くんがやってくれているから、なくて、むしろ、沖縄県内の政治情勢の議論が長かったんです。
江上：ああ、そうですか。
下河辺：県民投票っていうことで、どうなっていくか、名護の市長選挙から、ずっと一連のいろんな県民に対する意見聴取があった。この傾向を議論したんですね。そして、だんだんだん基地反対派ではなくなってきているっていう、ことがテーマだったわけです。
江上：基地の反対派でなくなってきているっていうのは、それは県民がですか。大田知事がですか。

下河辺：いや、いや、住民たちが
江上：住民たちが、ですか。
下河辺：投票の結果を見ていると、反対派のシェアがどんどん下がっていくんですね。
江上：それで、この日に県民投票が実施されていますね。先生が御厨先生のインタビューの中で、知事は県民投票にあまり賛成でなかったと語っておられます。ですが実は、私の記憶によると、大田知事が代理署名を拒否して、当時の村山内閣と真っ向から対立したときに、大田知事が国を相手にけんかするのは大変だ、それで、連合沖縄に是非、自分をバックアップして欲しいということを頼んだんです。それで連合沖縄の渡口さんが、じゃあ住民投票でもやって大田知事を支援するからということになって準備が始まったんです。しかし結果的には、時とともに次第に国と橋本内閣は和解するような状況になき、大田知事にとって、自分を助けてくれるはずの県民投票が足かせになっていった、ということでしょうか。
下河辺：足かせになったから困ったっていう、今は選挙にとって、そういうことが言えるんだけども、沖縄県にとっては、国とのつながりが見えてきたっていう、明るさとして受け止められてましたよね。
江上：そうですね。それで、県民投票をやれば、結果は「ノー」となることがわかっていたんですね。
下河辺：わかっていたつもりが、結果見たら、そうじゃなかったから、驚いたんですね。
江上：驚いたんですか。
下河辺：反対派が意外と小さかったんですね。
江上：投票率が意外と低かったですね。
下河辺：そうです。だから、知事としてはちょっと混乱した時期でした。それは、主に投票の中身から見ると、戦争を知らない若者の票が多いんですね。だから、現実にその日のときのめしの食い扶持っていう点で、反対してこないんですね。基地があるからこそ、入ってくるお金も少なくないし、そういう現実性がでてきちゃったから、なんか県民投票っていうのは、非常に複雑な情勢になっていました。
江上：そうですね。投票率が予想したより低かったというのは、そのときの沖縄県民の複雑な心情を反映していましたね。
下河辺：そのことが、とうとう大田さんが落選するっていうところまで、広がっていっちゃったわけですよね。
江上：そうですね。大田知事も沖縄の複雑な状況をずいぶん、気にしていたんですが。
下河辺：気にしてたっていうより、私があなたは選挙に今度負けると。負けるのは、若手の票がつかめてないと、若手の票がつかめないのは、戦争にこだわっているからだって言ったら、大田さんは自分は政治家として、そういう政治家として終わっていきたいと。だから、負けることよりも、説を曲げないっていうことで、いきたいっていうから、私はそれは立派ですって言って。だから、選挙の前にも、ちょっと負けるなっていう気がしたし、

知事自体もその気になっているなって、思ったですね。
江上：それは、大田さんの３期目の知事選の直前ですね。
下河辺：そうです。
江上：それで、海上基地反対ってということを大田さんが宣言したのは、その後の選挙ですね。
下河辺：そうです。
江上：でも、先生の表現では、大田知事は、県民投票に賛成でなかったという、ふうに書かれているんですけども。これは、どういう？
下河辺：いや、そのなんていうんですかね。県民投票で、圧倒的に軍事基地に反対が多いと思ったからなんですね。で、そういうの出すと、ちょっと、政府としても、アメリカとしても、ちょっと困るんじゃないかっていう。
江上：そういう意味ですね。そういう結果が出てしまうと困るというわけですね。
下河辺：そう。
江上：いま、せっかく和解しようとしているのに、それに水をかけるような話になりますからね。
下河辺：逆に出たんで、ちょっと、扱いが困ったんじゃないすか。

●９月の橋本・大田会談

江上：そうですね。それで、９月９日にさらに、事前の打ち合わせをなさってますけども、もうこのときは、先生のメモをもとに橋本内閣の公式発表が出るという直前ですけども、このときの事前の打ち合わせは、どういうことだったのですか。
下河辺：どういうことっていうと？
江上：９月１０日に首相と知事が会談しますね。その前に打ち合わせをするというのは、どういうことだったんですか。
下河辺：それは３月から半年かけた、積み上げそのものだから、
江上：その総整理をなさったんですか。
下河辺：調整っていうか、総理と知事が、その半年間のプロセスを了解したっていう形ですよね。
江上：そして、９月１０日に首相と知事が二人だけで会談なさったんですか。
下河辺：二人だけっていうのは。
江上：お付なしで。
下河辺：お付なしでなんでこと、ありえませんよ。総理が。
江上：そうですね。
下河辺：だから、しかるべき人が。
江上：周りにお付きの人たちがいたんだけども、実質的には直接二人で話されたというこ

とですか。
下河辺：話し合った。
江上：そういうことですね。このとき、先生はそばにおられたんですか？
下河辺：このときもいたと、思います。
江上：そうですね。でも話のやり取りはお二人だけで進んだということですね。このとき、お二人でどういうことを話されたのですか。
下河辺：いや、それはこれまでの調整のプロセスを説明したから、それを巡って二人でしゃべってましたよ。
江上：そうですか。もうこのへんのところは、実質的にもうシナリオの終わりの段階で、形式的なものですね。詰めの段階ですね。
下河辺：形式には結論の会議ですけどね。
江上：それで、お二人の会談のあとはみんな集まって、短時間で打ち上げるという考え方でやったと先生は述べておられます。その後、要するに沖縄問題についての内閣総理大臣談話・閣議決定が出されます。これを各新聞は一面トップで報道したわけです。それで、１１日、１２日に大田知事は関係者と徹底的に話し合い元気になっていったということですが。
　大田知事は、自分はもう決断した、それに国も全面的に経済振興策にバックアップしてくれるからこれでいくんだという覚悟ができたということでしょうか。
下河辺：ま、そういう経済的なことがあるけれでも、政治的にちょっと知事とのけんかじゃなくて、政府が援助してくれるっていう自信ができたのが、一番うれしかったんじゃないすか。

●橋本首相、海上ヘリポート案言及について

江上：そうですね。政府の支持が取り付けることができたということが大きかったでしょうね。沖縄の経済振興策は、政府の支援なかったら何もできませんからね。その後、９月１３日に大田知事が代理署名の合意書を政府に送る。ここで大田知事と橋本総理の実質的な和解が成立して、このあと総選挙になるわけですね。そこで一件落着となりましたが、そのあと、橋本首相が沖縄に入られて、海上ヘリポート案というのに、初めて言及されます。これについては、先生のところに以前からいろんなアメリカや日本の関係の業者や会社が、プランを持ってきましたよね。
下河辺：９月１７日の総理の沖縄入りは、普天間の土木工事で行ったんじゃないすからね。
江上：ええ。
下河辺：沖縄復帰の記念を祝して、総理の挨拶をして、その中で、安保上沖縄を軍事基地にすることは、了解して欲しいっていう声明をしに行ったんですよ。
江上：でも、その挨拶の中でちょっとだけ触れた海上ヘリポートがクローズアップされて、

マスメディアでも大きく取り上げられました。
下河辺：それは、ついでくらいの話ですね。
江上：そうですか。
下河辺：演説の内容は、普天間問題じゃないすから。
江上：でも、とくに沖縄側では、移設先がどこになるかが非常に話題になっていて、最初の嘉手納統合案が暗礁に乗り上げてしまって、すると次はどこかとうことで、海上ヘリポート構想を橋本首相が言及したとたんに大きく取り上げられたんですね。
下河辺：いえ、そんなことはないと思いますよ。
江上：そうですか。
下河辺：海上基地なんていうのは、総理や知事の話じゃないですからね。
江上：はあ、そうですか。
下河辺：漁民たちの話とか、市長の話とか、が中心でしたから
江上：でもやはり、このとき首相が移設案に言及されたのは影響が大きかったのではないでしょうか。
下河辺：ぜんぜん、触れないっていうのは変でしょう。
江上：そうですね。
下河辺：触れる立場はないから、一応、触れたっていうだけじゃないすか。
江上：一応、触れたといういうだけで、どうなるかは、その後のいろんな動向を見守るということですかね。
下河辺：そう。
江上：それで、先生のスケジュール・メモによりますと、１０月３日に首相と官房長官と古川官房副長官、大田知事と吉元副知事と先生で会食をなさって、これでもう、お疲れ様でしたという感じだったんですか。
下河辺：そうです。
江上：どちらで会食なさったんですか。
下河辺：これはどこでやったのかな。官邸でやったんじゃないすかね。
江上：そうですか。
下河辺：昼飯ですから。
江上：はあ、そうですか。先生としてはそれまで一所懸命、解決に向けて働きかけてこられたのですから、これで本当にほっとなさったんでしょうね。
下河辺：ほっとしませんでしたね
江上：あ、そうですか（笑）。
下河辺：これからが大変だと思いましたよ。
江上：ほう、そうですか。これはまだ、第一歩に過ぎないという感じですか。
下河辺：一歩というよりも、国と県との関係の事務でしかないわけですよ。だけど、沖縄県には沖縄県の仕事がいっぱいあるわけですよ。それにも私、触れてたから、これから本

当にどうしたらいいか、っていうのは大変でしたよ。この当時は。
江上：そうですか。まだやはり、前途に難問が山積しているという思いが強かったのですか。
下河辺：そうです。
江上：それでこのあとに、ある新聞で先生を首相補佐官に、という記事が出ます。だが先生はそれをお断りになって、あくまで政府の中に入らずにやるという姿勢を貫かれますね。
下河辺：私はそういう立場で沖縄のことを考えてきたわけじゃないから、ぜんぜんそんな気にはなりませんでしたね。
江上：そうですか。

●「下河辺メモ」に関する疑問――代理署名拒否問題

眞板：飲み込みが悪くて恐縮なんですけど、先生がお書きになった「下河辺メモ」を拝見するとですね、そもそもトラブルの原因になったのは、少女暴行事件であり、大田さんの代理署名拒否っていうことだったと思うんですけど、メモを拝見した感じで、大田さんの代理署名拒否っていうのは、要は土地問題であったというようなお話が以前あったと思うんですが、このメモを拝見する限りにおいて、土地問題ずばりについてお応えになっている、っていうのはよくよくみるとないなと、感じたんですが、
下河辺：土地問題だって言ったんですけれども。
眞板：たとえば、土地問題であるとすれば、このメモの中に、具体的に軍転特措法の問題であるとか、県側に有利なような働きかけが必要じゃないかというようなものが、あっても良かったんじゃないか、という気がしました。
下河辺：それ以前なんですよ。裁判は。安保条約と土地との関係、それを最高裁が裁定しちゃったわけですからね。だから、安保条約の下で、日本の憲法としては、土地の提供を拒否することはできませんっていうことの判決を大田知事も飲まざるを得なかったわけですね。だから、沖縄で米軍の土地ができることを否定していたのに肯定して仕事することになっただけですよね。
眞板：それでその裁判の判決の結果を受けて、米軍基地の土地問題というものをオーソライズしていったという
下河辺：そうです。
眞板：表現になるわけですね。あと、前後して恐縮なんですけども、この「下河辺メモ」のタイムスケジュールの中には入っていなかったんですが、３月の２３日に大田さんと橋本さんがお会いになられているようなんですが、これについては先生は関わっていらっしゃらなかったということで、こちらには入っていないんですか。
下河辺：いや、そうじゃないと思います。そのメモは私が行動した範囲だけが書いてあって、ほかの用事はいろいろありましたからね。県民との話し合いとか、琉球大学の学者と

の話し合いとか、新聞社との話し合いとか、いっぱいやっていましたから。

●首相談話――日米安保における沖縄米軍基地の重要性について

江上：それで、首相談話が出されますけども、沖縄問題についての内閣総理大臣談話の内容は、文章を読むと先生のメモをもとに談話が作られている、という感じですね。
下河辺：まあ、そう言っていますけども、私の文がなかったら、やんなかったか、っていったら、やるでしょうね。だから、参考になったろうっていうだけの話ですよ。
江上：それで、橋本総理の談話の中に、「日米安全保障条約は、日本の安全のみならずアジア・太平洋地域の平和と安全を維持していく上で、極めて重要な枠組みであります。米軍の施設・区域はその中心的な役割を果たすものであり、その安定的使用を確保することは重要であると認識しています」とあります。ここの部分について、御厨先生たちのオーラルの中で、日米安保が重要で、しかも沖縄の基地が極めて重要だということを国家の責任者が、県民に向かって言明して欲しいということで、これがこのくだりになっていて、これは重要なセンテンスになっている、ということを先生が述べられています。こういうふうに沖縄の基地が日本国家にとって必要だということ言った総理は、いままでいないんだと。これをはっきり、言ったほうがいいと、いうことを述べられています。これは先生の持論だったんでしょうか。
下河辺：そうです。
江上：そうですね。
下河辺：私の意見として言いましたけども、知事が沖縄に総理が来たときに、国家として必要だっていうことを是非言ってくれと、いうことを言いましたね。
江上：大田知事がですか。
下河辺：ええ。だから、土地の裁判を受ける話と国家としての総理の意見を受けるっていう、ふたつが、知事にとって県民に対して必要なことだったですね。自分の意見ではなくて、ふたつが客観的な政治情勢であることをちゃんとしたかったわけでしょ。
江上：これはとても重要なくだりですね。
下河辺：そうです。
江上：先生としては、橋本内閣にとっても大田知事にとってもこれは重要なことであるということですね。そしてここの部分が日米両政府からも評価されたということですね。
下河辺：そうです。

●つなぎ役としての下河辺氏の立場

江上：そういうことですね。先生の言及で、このくだりがそういう重要な意味をもっていたのだということを私は初めて知りました。

そしてまた御厨先生たちのオーラルで印象に残っている先生の言葉は、私は沖縄の立場に立つという言葉です。最初に大田知事と会われたときに、自分は沖縄の立場に立ってそのつなぎ役をするというようなことを先生はおっしゃっていますよね。それまで非常にかたくなだった大田知事が、先生につなぎ役をお願いしたいと言ったときに、一番心を動かしたのは、沖縄側に立つ、というこの言葉だったのではないでしょうか。どちらかといえば、先生は日本政府側の人ですから、日本政府側の人が沖縄側に立つよと言ったことがやはり、非常に大きな感銘を与えたんじゃないかなと私は思うんですが。

下河辺：それはちょっと、私には分かんないけれども、私は政府の代わりとか、学者の代わりっていうことでは、能力まったくありませんと、いまは政府を離れているし、学者じゃもちろんない、だけども沖縄に関心を持つ人間のひとりとして、大田知事との相談に乗りたいっていったんですね。そしたら、知事は本当にそうしてもらいたい、って言ってましたよ。そして、沖縄県民のいい人たちと話をすると、絶対反対って言う意見しかないから実務上との意見交換になんないんですね。反対運動のための論理はできるけれども、それじゃあ、毎日、行政的にどうしたらいいかっていう相談ができないっていう。そこへ私が現れたから、いろいろ聞きたかったんでしょうけど。私にすると、大田さんっていう人が、どういう考え方をするのかっていうのを勉強したいっていうのが、一番大きかったですね。だから、こういうとき、大田さんはどういうふうに考えんのかなっていうことをいろんな点で勉強しましたよ。

江上：大田知事の著書も読まれたんですか。

下河辺：そうですよね。

江上：あのとき、橋本総理も大田知事の著書を読まれたんですよね。

下河辺：そうです。

江上：『高等弁務官』などの著書を。

下河辺：そうです。そうです。

江上：大田知事がどういう考え方をするか、ということを知るするために、彼の著書を読んだりして研究なさったんですね。

下河辺：私は大田さんが、国会議員になったことは、とっても寂しかったです。大田さんが選ぶ道ではないと、思ったんですね。あんな、沖縄から出てきて、ひとりの議員になったところで、彼の力を発揮できませんよ。質問だってね、５分しか許されないとか、そんなんで、むしろ、彼は学者として残って、意見を言う立場を確保したら良かったのに、と思いますね。残念でしたね。

江上：社民党から担がれたっていうこともあったしょうけどね。

下河辺：そうでしょう。

江上：最近も、大田さんは有事法制関係で本書いてられますよ。学者魂はまだ健在のようですね。でも国会ではかつての精彩はないようですね。

下河辺：ないですよ。そりゃ、無理ですよね。

江上：限界がありますしね。

●御厨オーラルのその後について

眞板：この御厨先生のオーラルヒストリーなんですが、どうも、５回目が最終回のようなんですけれども、終わりのほうを拝見すると、まだ続きそうな雰囲気、ま、そういう余韻を残されているみたいなんですね。
下河辺：あ、そうですか。
眞板：で、何か動きがあったらまたやりましょうねって、いうような感じで、終わっているんですよ。
下河辺：それはもちろん、なんか沖縄問題が発展したら、やるつもりだってでしょう。
江上：そのときはですね。
眞板：でも、実はこのあと、最後が９８年３月になっているんですが、このあとの７月の参院選でご承知の通り、自民党が大敗して、橋本内閣が潰れ、大田さんの方も、１１月の選挙に向けて、公明党も自民党の方に乗りっていう中で、非常に状況が両方とも悪くなっていくんだと思うんですけど。というと、もう１回くらいあっても良さそうだなと。
下河辺：そんなこと言ったら、永遠に終わんない。
一同：（笑）
下河辺：沖縄がいなくなっちゃうわけでもないし、
江上：沖縄の問題は永遠ですね（笑）沖縄の問題これからまたどうなるか、わかりませんね。

●ラムズフェルド国防長官訪沖時の稲嶺知事の対応

下河辺：稲嶺さんが、こないだの国防長官との話し合いを新聞で見ている限り、何にもわかってないね。いまの軍とは何かとか、沖縄っていうのは何だとか、アジアは何だっていうことに、ついてまったくだめね。
江上：そうですか。
下河辺：なんか、聞いてて悲しかった。国防長官が機嫌が悪くなったっていうのは。
江上：分かる気がするということですか。（笑）
下河辺：なんか、本当に日本の恥のような気がしてね。せっかく来たんだから、もっとちょっと上手な頼み方があってもね。
江上：両者の会談は７項目の陳情の場ににになっていましたね。
下河辺：しかも、その７項目がなんか昔話よね。
江上：ラムズフェルド国防長官の対応は取り付く島のないような感じでしたね。稲嶺知事もどちらかと言えば、県民向けのアクションだったんでしょうね。ラムズフェルド国防長

官と話しながら、稲嶺知事は県民に対して、国防長官にこれだけ言ったぞといいたかったんでしょうね。
下河辺：そりゃそうですよ。言いたいことぜんぶ、言っとかないと、まずいって県民に対して思ったから、聞くほうはそんなこと聞いてもしょうがない。
江上：なんでそんなことを聞かなければいけないのかと憮然としたそうですね（笑）。
下河辺：そう。

●大田知事の言動の不可解さ

江上：さっきの話の続きですけども、先生と大田知事が話されたときに、沖縄のことはなかなか日本政府の側に伝わらないという話がありましたね。本当の沖縄の心情とか要望とかがなかなか日本政府のほうに伝わらないということを大田知事が先生におっしゃいましたね。
下河辺：ただ、まさにそうなんだけども、大田さんは何を言おうとしているか、私にもわかんない面があるし。
江上：橋本首相もそんなことをおっしゃったことがありますね。ころころ変わるので、大田さんが何を言っているのかわからない、と。
下河辺：ころころ変わるって言うよりも、本当に何を思ってんだろうっていう。県からはもう、予算陳情のテーマでしかありませんからね。安保条約でも、軍事基地の問題でもなくて、ようするに補助金が欲しいって方向に行っちゃってますからね。
江上：だから、大田知事が代理署名に応諾するにあたって、５０億円の調整費と政策協議会の設置という形で国と沖縄県が和解するとなったことに、とくに大田県政の支持母体が抗議しましたね。
下河辺：それ、どういう意味ですか。
江上：基地反対と訴え、基地をなんとかしてくれって言い続けたのに、最終的に５０億円の調整費を始めとした経済振興策で妥結したと受け止めた人たちも少なくなかったんですね。
下河辺：調整費は基地反対と何にも関係ないんじゃないすか。むしろ、返還した土地の開発についての調整費なんてなことはやったけどね。だけど、返ってくれさえすりゃ、いいんだっていう人にとっては、調整費って何の関係もないんじゃないんすか。返ってきても役に立ったところって、ほとんどないもんね。
眞板：５０億の調整費が各省庁に下りていったときに、食い散らかされるというような表現がオーラルの中でもあったと思うんですけど、タテ割り行政の中で、こうなってしまうのしょうがないんですか。
下河辺：しょうがないでしょうね。私たちは調整費じゃなくて、ちゃんとプロジェクトやろうっていうのに、できなかったわけですよね。沖縄県がまとめきれないんですよ。

江上：あ、沖縄県がまとめきれなかったんですか。
下河辺：あれやこれや、あれやこれや、言うだけで、まとめるって方向じゃないんですね。で、県がこれはいらないっていう立場がとれなかったのは、かわいそうでしたね。県民が言っているの全部やってくれって言う以外ないすよね。だから、５０億でも１００億でも、いいよって言ったら、まとまったかもしんないすね。だけど、５０億って決めちゃうと、枠の中に納めることが、誰にもできなくなった。
江上：当時の大蔵省としてもそんなにのべつなく出すわけにいかなかったでしょうから。
下河辺：いやあ、おそらく、何でも出したんじゃないすか。
江上：そうですか。
下河辺：沖縄の中に入ることであれば。
江上：でも沖縄県としてその５０億をどういうふうに使うかというのは、十分対応できなかったんでしょうか。
下河辺：できなかったですね。岡本さんみたいな人が行って、市町村長おだて歩いちゃったから、市町村長みんな期待しているわけですよ。それで、県はそれの調整ができないから、だめですよね。
眞板：岡本さんが配って歩いたお金って、その５０億円の調整費だったのですか。
下河辺：いえ、その外側です。
眞板：外側なんですか。
江上：５０億円の調整費は、３０億と２０億に分けるんですね、雇用対策費と調査費として。
下河辺：分けてんです。
江上：大田知事が代理署名を応諾するにあたって、いろんな関係者と話をしました。それで、知事は結局、日本政府と妥協したんじゃないかっという批判が大学の関係者などから出てくるんですが、それを大田知事は自信を持って説得ではなく説教をしてしまったと、いうのが逆に大田知事を支えた大学の知人たちを余計に硬化させてしまったんじゃないかという先生の見方が御厨先生方のオーラルにありますね。
下河辺：あ、そうですか。大学の先生になんかして、硬化したって別にいいじゃないですか。
江上：(笑)。
下河辺：どうぞ自由なこと言って下さいっていうだけだもの。

●行政の立場

江上：でも、ここはいかにも大田先生らしいと思うんですが。大田先生は琉球大学で学生に教えていましたから、教え子に話すみたいに、自分がいちど決めた方針について言い聞かせたのではないか、とそのように感じました。でも先生は、行政というのは、自信がな

いことを売らなければだめな商売だ（笑）　とおっしゃっていますが、これは大田先生には無理だったろうな、という気がしますね。行政っていうのは、やっぱりそうなんですか？
下河辺：だって、行政に詳しい人ほど、結論ってないんですよ。どうしていいのかわからないっていうのが、行政の立場ですよ。いままでは、どうしていいか、わからないっていうことを言うことをしなかったのが、役人なんですよ。どうしていいのか、わからないのは、いまも昔も同じなんですね。だけど、最近では、それを言っちゃうっていうことができるようになっただけ、役人は気楽なんじゃないすか。政治家と住民に押しつけて、自分じゃおっしゃるとおりにやるだけで、わからないって言っていいでしょう。そう言ったほうが、かえって立派なようなことを言われたりする。あれだったら、そんな役人いらないっていう、感じがするけどね。いま日本ではそういう役人のほうが、受けるんじゃないすか。
江上：でも大田知事は代理署名の応諾を決断し、そういう形で政府と和解してやっていくんだっていうことは確信をもっていましたから、それで突き進んで、支持母体に対してもそのことを一所懸命説明なさったんですよね。
下河辺：それに大田さんは、アメリカと付き合いが深いし、学者らしく見通しとしては、楽観的だったんじゃないすかね。アジアの軍事情勢もぜんぜん違っちゃって、台湾問題も朝鮮問題もなくなっちゃうような事態で、米軍がいることの意味が、なくなっていくことは、アメリカ人からも聞いてて、所詮時間の問題だったとしか思っていなかったんじゃないすか。

●大田知事の「海兵隊撤退論」

江上：そうですか。しかしながら大田県政の末期には海兵隊の撤去を大田さんは訴えました。県知事として、県民の代表として、言わざるを得なかったんでしょうか。
下河辺：言わざるを得ないじゃなくて、アメリカから聞いているから、言ってんじゃないすか。アメリカの軍は、なるべく早く、撤去する方向なんじゃないすかね。
江上：でも、先生のお話だと、もし海兵隊を撤去することがあったとしても、沖縄の基地はリニューアルした形で、最新鋭の装置を備えた形で、やはり必要だということですか。
下河辺：いや、必要かどうか、そこが混乱してくんじゃないすかね。普天間でも移転して近代化っていうこと言っているけれども、海兵隊自体がいらなくなったら、近代化もへったくれもないすよね。
江上：そうですね。
下河辺：ま、そこのところは、まだ今後の情勢を見ないと分からない。
江上：そういう実地調査のために、ラムズフェルド国防長官は沖縄に今回、立ち寄ったんでしょうね。
下河辺：中国が運営に失敗して、難民が出たり、テロが出たりしたら、沖縄、また緊張す

るでしょう。そうすると、米軍がやっぱり緊張状態になって、撤去できないっていうことになるでしょうね。そのときは、おそらく、普天間の移転を急ぐでしょうね。いまだと、必要がないから、移転を急いでいないんで、ちょっと、なんとなく、議論が複雑っていうか、結論が出ない状態ですよね。

江上:日米安保体制も沖縄を取り巻く情勢も、いま不透明な状況になってきていますよね。

下河辺：そう。軍事情勢がぜんぜん違っちゃったから、

江上：そうですね。今後どういうふうになっていくか、その展望がまだ見えないところがありますね。

眞板：普天間の移設問題というのは、橋本さんと大田さんがなさったころと、いまも基本的には海兵隊が出てってくんないかなあっていうのを“待ち”というか。確か御厨先生のオーラルをお答えになった時期も、５０％の確率があるなら、もうちょっと、様子を見てみようか、というようなお話が出てましたけれども、基本的にはいまの内閣も、稲嶺さんも５０％の確率があるなら、もうちょっと様子を見てようか、っていうような感じなんですかね。

下河辺：いや、あの当時、まだ冷戦という恐怖が残っている状態でそう言ったんで、冷戦の恐怖がなくなって、朝鮮問題も台湾問題もないっていう事態ではぜんぜん違うんじゃないんすか。普天間がいらないか、いるかって話だけになっちゃって、いらないって意見が強くなってるんじゃないすか。だから、普天間の海兵隊の役割が、改めて議論なんで、今度も国防長官がそれを確かめに来たんじゃないすかね。で、それは軍事じゃなくて、平和なもとでの医療とか教育っていうことに、役割があるかないかが、問われているんじゃないすか。

眞板：確かに、ラムズフェルドさんは部隊の近代化ということをかなり、あ、近代化ではなくハイテク化ですね。を進めることによって、沖縄という地域、沖縄には限りませんが、そこに部隊を貼りつけておくということに対して、非常に懐疑的な方ですよね。実際、今回のイラクでも、ご承知の通り、ほとんどがアメリカ本国から部隊が行っているわけで、沖縄から行ったのは、いわばその交代要員とか、護衛のために、嘉手納からＦ１５がちょこっと行ったくらいですから、基本的にはあんまり必要ないわけですよね。そういう意味では。

下河辺：だけど、沖縄っていうのは、米軍がいなくなったら、ゲリラの巣になんないすかね。抵抗がなくなった沖縄って、とっても危ないって気がするんすね。アジアのテロ行為として、琉球のどっかの島を占拠されたら、ちょっと大変ですね。

江上：島はたくさんありますね。

下河辺：そう。だから、米軍が平和のために、いてくれるといいってことさえ、言う人もいますよね。

江上：沖縄も昔と違って、日米安保体制の重要性については、先ほどの大田さんの話ではありませんけど、かなり理解を示すようになりました。かつては、米軍基地絶対反対と主

張する人たちは多かったですけど、いま、そういう人は少なくなってきています。
下河辺：いないですよ。
江上：だから段階的に、だが目に見える形で負担を軽減して欲しいというように、昔に比べると主張が基地撤去から基地縮小へと穏和になってきました。
下河辺：なにしろ、県民が１８０万人を超えて、２００万の方向へ行っているっていうことで、集まっているのは若者ばっかりだから、戦争なんていうことにぜんぜん、無関係ですよね。沖縄での楽しみ方を求めている青年たちですからね。

●「下河辺メモ」進行時の感想

江上：それで、橋本首相と大田知事の和解に至るまで先生のタイムテーブルは、本当に細かくメモされていますが、実際、この通りに動いていったんですね。
下河辺：そうですね。
江上：このタイムテーブルを作られたのは、先生ですか。
下河辺：そうですね。
江上:ほとんどこの通りにずっと動いていったというのは、振り返ってみると見事ですね。
下河辺：見事っていうよりも、結果がどうなるか、わかんないでやっていましたから、結果的にその表を見ると、ああ、そいうスケジュールなんて気楽にいえますけど、やっているわれわれにすると、１ヵ月ごとにちょっとどうなるか、ちょっとどうなるかってやってきましたからね。橋本さんだって、大田さんだって、いつまでもこっちの意見を聞いてくれる状態にいるとは、あんまり自信をもっていませんでしたから。
江上：先生はこの期間、阪神大震災の問題もありましたしね。
下河辺：そうです。
江上：そういう仕事をやられながら沖縄問題にも取り組んでおられたんですね。
下河辺：そうですよね。
江上：大変だったでしょうね。
下河辺：大変っていえば大変だけども、太陽っていうのは、ちゃんと１日１日２４時間しかないんすからね。だから、忙しいだろうって言われたら、忙しいって言うけども、それ以上に、間に合わないと時間が延びるってなんてことないすものね。いくつ仕事があったって、３６５日、２４時間の中でこなすしかないすもんね。

●『沖縄の決断』（大田昌秀著）

江上：後日談ですが、大田知事が３期目の知事選で破れた後、朝日新聞社から『沖縄の決断』という著書を出されました。この中で大田さんはわざわざ、１項目をさいて先生のことに言及していますね。

下河辺：書きづらいことだったじゃないすか。本を見るとね。
江上：そうですか。
下河辺：本当になんか恐縮するような書き方してる。
江上：下河辺淳氏という見出しをつけて、先生からいろいろ助力を受けたと大田さんは述べています。
下河辺：いやあ、本当ね。なんかずいぶん、いろんなこと、ありましたし、知事さんと内緒の話をするのはステーキ屋さんで、なんとかっていうステーキ屋がいつも決まっていて、昼飯ステーキって言うと、なんか特別な相談があるなあと。食いながら、ちゃんと、難しいこと言い出すんですよ。
江上：大田さんはステーキがお好きなんですね。
下河辺：ステーキ大好きですね。
江上：そうですか。いかにもアメリカに留学した先生らしいですね。確か、ウィスキーは「シーバス・リーガル」がお好きと聞きました。
　この著書では先生に対する感謝の気持ちがよく表われているんですが、ただ普天間飛行場の跡地利用計画については、いまひとつ実効性に欠けると先生がおっしゃったそうです。それで、大田知事が下河辺先生にじゃあどうしたらいいですか、とたずねたら、下河辺先生は、普天間飛行場はそのまま、民間の飛行場にしたほうがいいというふうに応えられたそうです。それで、ここのところは、ちょっと意見が合わなかったと述べておられます。この点だけ意見が合わなかったとおっしゃっていますね。
下河辺：そうですね。普天間の人たちも、騒音というようなことと軍事的危険っていうことがあって、どっか行ってくれって言ってんのに、行ちゃったら、またヘリコプターじゃあ、騒音とか、なんか飛行機が落ちたりする危険がないから、嫌だって言う人が圧倒的に多くて、県庁もそう言ってましたよ。だけど、私はいまでも、県庁の昔の職員が代わったから、新しい職員に同じこと提案しているんですよね。沖縄県っていうのは、島でできた県だから、ヘリコプターで全島をつなぐ、ネットワークを作ったほうが、行政的にもいいし、病院にも便利だし、食料品から宅送便まで、全部それがいいということをいまでも言ってんですよ。

●伊波市長、来訪について

江上：先日、伊波宜野湾市長がお見えになった時にもそのことをおっしゃいましたか？
下河辺：そう言ったんです。
江上：伊波さんはなんって言ってましたか。
下河辺：そしたら、なんか、普天間っていうのは、どうも基地をなくすっていうことで、自分はやってきたんで、基地がなくなることが前提だっていう。そして、なかなかなくなんないっていう軍事情勢が、出てきちゃったっていう。軍事情勢が厳しければ、軍備の近

代化のために、米軍が自分で好んで移転したに違いないのに、移転するお金をかけるまでもなく、いらなくなったっていう。だから、返還がかえって早いかもしれないよっていって、市長は困っていましたよ。それで、跡地はどうするって話で、３分の１は国の施設で埋めたいっていうから、そんなの期待してたら、いつになるのかわかんないし、特に地主に土地を返すなんていう話をすると、３０年以上かかるよと言って、市長、困ってましたよ。それじゃあ、あなたはどうするつもりだって言うから、県と企業との合弁のヘリポート会社を作って、ヘリポートを運営した方が、県生活にとってプラスが大きいっていう話をして、それは、いまでも完全にそう思っているって、言ったんですけどね。騒音がやっとなくなったら、またヘリコプターっていうんで、市民は反対でしょうって言ってましたよ。

江上：でも、そのヘリポート構想では、いまの普天間基地を全部使う必要はないですよね。

下河辺：全部使ったらいいと思いますよ。

江上：全部使ったほうがいいですか。全部使ってそういった離島の交通ネットワークを作るんですか。

下河辺：もしやれば、あそこの山のところに、病院くらいは作ったらいいかもしれない。普天間って、病院が弱いですから。だから、やったらいいし。ショッピングセンターなんていうのも、ヘリポート基地には絶対必要かもしれないすね。

江上：そうですね。

眞板：宜野湾マリーナの方にも、ショッピングセンター作っているんですけどね。いま、海のほうにも、ダイエーが一度入ろうとして、結局、経営破たんしちゃったんで、撤退しちゃいましたけど。そういう話もあったりで、いま、コンベンションの周りあたりも、開発をやっているんですよ。

下河辺：そうですね。

●梶山官房長官との馴れ初めについて

江上：話は変わりますが、先生のタイムスケジュール・メモの一番最初に、梶山官房長官が先生のところに何とかしてくれと依頼に来ました。それ以前から梶山官房長官とはお付き合いがあったんですか。

下河辺：いやあ、もちろん、若いころから、彼は茨城県で、私を茨城県の知事にしようとしたり、知事を断ったら、衆議院に立候補しろって言ったり、大変だったんですよ。

江上、眞板：（笑）。

下河辺：それを一切選挙とか政治は嫌いだって、断ったんです。

江上：そうですか。

下河辺：断ったら、やっと、彼があきらめたばっかりに、沖縄を手伝えとか、何は手伝えって言って、「ふるさと創生」なんていうのを手伝わされたり、まあ、いろんなことやらさ

れました。彼が死んでホッとしていますよ。
江上、眞板：(笑)
江上：そうですか。
下河辺：生きてたら、いまもまた何か言って来たに違いない。
江上、眞板：(笑)。
江上：梶山官房長官のお人柄はどんな感じだったんですか。
下河辺：いやあ、いい人ですよ。
江上：そうですか。
下河辺：彼は陸軍だったから、沖縄に陸軍のひとりとしてお詫びしたいなんていう人でしたからね。
江上：そうでしたね。そんなことをおっしゃっていましたね。私も一度、沖縄で、梶山さんとお話したことがあるんです。
下河辺：ああ、そうですか。

●沖縄サミット

江上：はい。サミットが沖縄に決まった直後に、もう官房長官は辞めておられましたけども。稲嶺知事と、もう亡くなりましたけどオリオンビールの会長なさってた金城さんと私が梶山さんと一緒に、地元紙主催でサミットについて会談したことがあります。その後、一緒にお酒も飲みましたので、思い出深いですね。
眞板：サミットといえば、御厨オーラルを拝見してたら、沖縄でやったらいいじゃないか、というようなくだりがでてくるんですが、あのアイディアはもしかして、下河辺先生なんですか。
下河辺：そうですね。
眞板：実は大田さんが自分の手柄だと言っていましたけど。
下河辺：大田さんがもちろん、やったんですけども、大田さんにちょっとやったら、どうかって言ったんですよ。無理ですかねえ、なんて言って、ちょっと、やっぱり言って見たかったんじゃないすか。
江上：サミットの誘致を大田さんも要望していましたね。
眞板：はい。
江上：先生とのお話し合いでサミットがあったんですね。
下河辺：だけど、意外とフィジカルにホテルがうまくできないんですね。その各国みんな分散してホテルっていうときに、各国に割り振るホテルが分散して難しくて、なかなかだめですね。
眞板：ちょっと大変でしたね。あの宿割りっていうんですかね。
下河辺：そうです。

江上：やはり福岡と宮崎のほうが条件的には良かったんでしょうか。
下河辺：そりゃあ、やりいいでしょうね。
江上：あれは、やはり小渕首相の政治的判断だったんですね。
下河辺：宮崎なんてシーガイアがなかったら、できないでしょうしね。いまなら沖縄もホテルが増えたからやれるかもね。
眞板：サミットのときは、一番遠いイタリアでしたかね、読谷村のホテルまでいきましたからね。
下河辺：そう。そうですよ。
眞板：道路がないものですから、５８号は警備のために基本的にストップになちゃって、地域の人は相当、困ったみたいですけどね。

●蓬莱経済圏構想

江上：ところで梶山官房長官が沖縄に来るたびに蓬莱経済圏構想について講演してましたけど、あれはやはり先生のアイディアだったんですか。
下河辺：そりゃそうですよね。台湾問題もあったし、中国問題もあったから、日本の東京政府がやるよりも、沖縄、台湾、福建省とつながることは、とても大きな意味があるということを梶山さんも認めてたから、蓬莱経済圏っていうのは、彼は熱心でしたね。
江上：そうですね。
下河辺：沖縄にしても、福建省に事務所作ったりして、ちょっとだけ、はじめたんですけども、吉元が辞めたら、やる人がいなくなっちゃったんですね。あれ、吉元がひとりではりきってましたから。
江上：そうですね。やはり交易が自由にできるようないろんなしかけも必要だったでしょうね。
下河辺：必要だし、できそうだったんですよね。
江上：あ、できそうだったんですか。それは、旗振り役の吉元さんがいなくなった、っていうんで。
下河辺：そう。
江上：それで消えていったんですか。

●台湾について

下河辺：消えちゃったんですね。それで、台湾っていうのが、ちょっと蒋介石の台湾っていうイメージを完全に消えるときのちょうど、真っ最中でしたから、いまだったら、もっと楽にできたと思うんですね。
　台湾っていうのはかわいそうな島で、台湾人のための台湾考えられるのは、最近ですも

んね。
江上：そうですね。本省人と外省人の歴史的な軋轢もありますしね。
下河辺：そうです。
江上：国民党が完全に力で台湾人を制圧した形になっていましたね。それが、最近になって状況が変わってきました。
下河辺：やっと片付き始まったんで、蒋介石親子が死んだあと、連れてきた兵隊の始末が誰にもできないんですね。老兵問題と称して、もう戦えない年寄りの軍隊が台湾に残っちゃったんですね。それで、台湾の人が、自分の生まれ故郷に戻そうっていうことで、北京と相談したんですね。そしたら、北京は自分たちの敵ですから、面倒見られないんですね。だから、むしろあなたがたが、直接その地域の代表と相談して、戻したらいいっていうサジェッションだったんですね。で、台湾へ行った国民党の人たちが、故郷の地域の委員会に申し込んだんですね。そしたら、受け付けたところは、3分の1くらいで、3分の2は、われわれは敵にして、逃げた人を受け入れられないって言って、墓さえ入れないんですね。だから、台湾に墓を作った人が少しいますけどね。なんか、生まれ故郷じゃない地域に、帰っていった兵隊もいたりしましてね。歴史の悲劇ですね。
江上：沖縄にとっても台湾と中国本土の問題は非常に大きな問題なんですけども、今後、台湾と中国がひとつになるか、ふたつになるかという問題は、それほど大事にならずに解決に向かっていくでしょうか。

●尖閣諸島の問題

下河辺：まあ、大丈夫ですね。若手たちって、そういう問題意識もっていないですよ。だから、あのあたりで、尖閣列島だけがちょっとトラブルですけどもね。
江上：尖閣はいまでももめていますね。
下河辺：だけど、鄧小平なんかは、尖閣列島は日本と中国とで共同管理したら、いいんじゃないのって言ってんですね。それは穏やかな意見ですよね。
江上：そうです。そのようにすれば問題はなくなるんですが。今でも中国から調査船が時々やって来たりして紛争の種になっています。
下河辺：そうです。
江上：日本の海上保安庁の監視船が追っかけたりしていますね。共同でやればいいんですよね。日本はしかし、尖閣諸島は日本の領土だって言っていますし、中国は中国の領土って言い張っている。
下河辺：日本の外務省は共同で開発はいいけれども、土地は日本って決めたらば、やるって言ってんですね。中国は、それを決めんのが難しいから、共同開発って言ってんのに、ちょっと、意見が食い違っていますね。
江上：意見が食い違ってますね。そのへんのところが少しずつ時間がたてば平和な方法で

解決できるんでしょうか。
下河辺：いやあ、ああいう領土問題っていうのは、どこだって同じですよね。領土問題が素直に片付く、なんていう経験はないわけでしょ。
江上：それは懸案ですか。
下河辺：そうですよ。北方領土ひとつ片付かないんですからね。
江上：そうですね。そういう意味では、沖縄返還の問題というのはよく決着したものですね、米軍基地は残りましたが。
下河辺：ええ、よく片付いて、佐藤さんの手柄話でノーベル賞までもらったわけですよね。
江上：やはりそれだけの価値はあるのでしょうか。
下河辺：価値はあるけども、何の取引したかは秘密になっちゃったから、ちょっと困ったもんですよね。
江上：このことについては、首相秘書官だった楠田さんも最近、亡くなりましたし、ずっとわからないままになるのでしょうか。これは日本の外交文書に残っていないんでしょうが。
下河辺：残っているでしょうね。
江上：残っています？　そうですか。では日本の外交文書がもし公開されるようなことになれば、そこのところは出てくるかもしれない。
下河辺：出てくるわけですよ。だから、むしろ、アメリカから先にでるんじゃないですか。
江上：先生、きょうはどうもありがとうございました。長い間お付き合いいただいて恐縮ですが、来週が最後になりますけども、これにまつわるその後の話とその関連するような話をまた伺いたいと思います。ありがとうございました。

（了）
（次回は１１月２５日午後２時）